5月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　5月7日

相変わらず出荷は極端に少ない。 今日の状態で荷降し場には、2山で 20㎥ ほどが降りているに過ぎなかった。
市場の方も出荷をお願いしているが、市況を見てみるとわずか 370㎥ 足らずの出荷に対して落札率は85％に留まっている。
こうなると仮に出荷量が増えたとしても、どれくらい売り切れるものなのか？
今回の市はこの辺りがポイントだろう。
まず明細書の最初のページの市況を見てみる。 スギの3.0m が総崩れになっている。
主力商品であった3.0m の20～28cmの中目材が半分近く残っている。更にその下の寸法で16～18cmも売れ行きが悪い。 どうやら3.0mが落札率低下の原因になっている様だ。
価格は前回比を見ると、やや下げ気味であるが、これはあくまでも落札できた価格の変動である。
実際に入った札の値はもっと低かった事が伺える。 落札率は悪いがく、依然として応札枚数は多いとの事なので、市の落札基準が追い付かないほど相場の下落が進んだ結果の様だ。
3.0m の中目なども半分ほどしか売れない陰に、2番札以下も何枚かあるような物件が不落札になっている物と思える。
「3.0mは安くすればまだ売れる。」という事になるが、なぜ安いかと言えば すでにかなりの材が水を揚げ皮が剥け始めている。
つまり 今まで品薄が続いてきたので、買って急いで**製品の形にしての在庫**は欲しい。
しかし、売り先が無いのでそう高くは買えない。と言った背景の現れだろう。
結論としては、**今は3.0m材を生産すべきでは無い**。
4.0m材はと見れば、13,000 円/㎥ 位で瑕疵のあるもの以外はほぼ全量売り切っている。
今回の4号物件は 16cm 一目の椪だが、11,820円/㎥を不落札にしている。 以前なら落札していたかもしれない価格だ。 少し欄が下がって6号物件は 14cm 一目の椪だ。
こちらは4号物件と同じ価格で落札している。 おそらく使い道は同じだろう。 4.0mの3寸5分角を採る寸法だ。 4号物件の札も 6号物件を落札したのと同じ買い方が入れた札と思われる。
となると、取れる製品は同じ物だから、丸太材積が張る4号物件はもう少し安く入れたい所だろうが、4.0mは3.0mに比べて競争が激しい。　6号と7号はスギとヒノキの違いこそあるがそれぞれ4枚の応札がある。 4枚の競争で勝ち残ったのが、今見えている落札金額である。
その他3.0mでは36号物件は2枚の応札があるが、2番札は少し離れている。 これに対して次の37号物件は複数の出荷者の混椪である。 こちらは2番札が競っているし、応札も3枚ある結果的に近い価格で落札されているが、明暗を分けたのは、36号の方は少し若い、これに対して混椪の方には芯目が締まり、年輪の詰まった物が含まれていた。 これだと年輪の詰まった物が不利にも思えるが、量的にまとまった量は無い、となると他の材と一緒に量の力を借りて売ったのは得策であったろう。
全体的に見れば木が水を揚げて、そろそろ買い控えが始まる時季にしては応札枚数が多い。
落札した物件のほとんどに複数枚札が入っている事は、ま**だしばらくは買い方が付いて来る気配がある。** 但し3.0m造材はしばらくは封印すべきである。

調査日　素材生産協同組合　5月9日

こちらの市でも入荷が少ないとは言え、荷降ろし場には 100㎥ 程の入荷材が高く積まれ
仕分けを待ている状態だった。 おそらく国有林材の入荷であろう。
こちらの市の特徴として、広葉樹が多い事が挙げられる。
今回も新規の広葉樹が、沢山市に掛かっていた。
サクラ･ナラ･イチョウなどはなかなか良い物が出品されていたが、これらが多く出品されている
という事は、素材生産業者が、本格的にスギ･ヒノキの生産を始めていないと言う事でもあるかも
知れない。 しかしながら、いかにしても広葉樹を生産するには時季が遅い。
ナラ材などは、外国産が高価な物になり、国内的にはナラ枯れ病が蔓延している中で
出品された物は素性も良く、かなり良質なものと思えたが、近づいてみれば ピンホール と呼ばれる
1mmにも満たない小さな穴から、白いフラスが排出され、それが一面に広がっている。
買い方も 「良い木なのにもったいない。 今はもう5月だぜ。何でこんな時季に伐ったかねぇ。」
と言って残念がっている。 そんな中で唯一 573号物件だけが、虫害が微小と判断されたのか
33,000円/㎥ で落札されている。 表面には見えないが皮の下では虫害が無いとは思えない。
その他のナラは、2.0m材で7,300円均一、3.0m材でも8,600円均一で落札されている。
広葉樹の造材は、かつては2.1m(七尺)と言う時代があった。特にクリなどだが、これは電柱の
横木の長さであったと言われている。　またケヤキが珍重された頃は、3.0m或いは6.0mの
造材方法もあった。 3.0や6.0など3の倍数の長さは、家の中で**縦に使う**長さである。
従ってケヤキを大黒柱などに使う場合は3の倍数であった。
これに対して、3.65又は4.0mと言う長さは、1.8m 間隔で立てられた管柱の頭や足元を繋ぐ長さで
横にして使う長さである。 長さによって山でプロセッサで切断した瞬間に用途が決まるのである。
広葉樹の3.0mは、柱使いでは無く集成材として使われる様だ。この場合3.0mとしての意味は無い。
広葉樹の場合は建物以外に様々な用途があるが、立木の時の形状によって造材の長さは、
制限を受ける。 その場合は出来れば汎用性のある2.0m 造材を基本に考えるべきだろう。
もちろん、通直であれば、4.0mでも良いとは思うが、むやみに長く造材する事は得策ではない。
もともと まっすぐに成長せず枝分かれをしながら大きくなる樹種である。
やみくもに長く伐るのは、帰って瑕疵を強調するようなものである。
今回の材も出荷時期が適正であれば、みな30,000円/㎥ 位では売れたはずであろう良材であった。
広葉樹に関しては今回は幅広い充実した品揃えであったが、買い方の目は冷ややかであった。
　針葉樹では、群馬森林管理署からの出材が、3件あった。 3件と言えども 56㎥ は有る。
スギは相変らず3.0m推しでこれが 49㎥、ヒノキは2.0mが 8㎥ である。
ここで現れた単価は 11,000円を確実に割り込んでいる。 国有林材なので予定価格より安くは
落札できないであろうから一般材よりは少し高めだが、値下がり傾向はあきらかの様である。
ヒノキの2.0m に至っては一時的に応札無しの状態だった。
一般材に目を転じると、最初の14物件は空欄になってるが、これは以前からの売れ残りである。
見るべきはその下の615号物件からであるが、価格の減速が著しい3.0m 材の椪が多い。
その為か3.0mの柱用丸太でも品質によっては、10,000円/㎥ を割り込む物も現われた。
また 2.0m 造材も多くなっている。今の所は売れてはいるが、かなり太い物も混じっている。
根曲がりを外すべく伐った元玉だろうが、元玉に関しては根張の部分を1.0m　捨てる事で、
何とか 4.0m に伐れない物か？　元玉の中身と言う物は 2番･3番玉に代えがたい価値がある。
最近の傾向として生産効率が上がる一方で、伐採･造材･搬出が終われば林産事業の完了
と言った感じがある。使う側の買い方との利害が乖離してしまっている様な気がする。